

平成24年10月18日(木)、地域共生ステーションづくりのための第7回目のワークショップが、市民25名が参加して市役所西庁舎で開催されました。

地域共生ステーションについては、今年4月から6回のワークショップを重ね、議論してきた結果、コンセプトとして「ふらっと小屋(こやあ)」～一人ひとりが主人公～が決まりました。この言葉には、「誰でも気軽に立ち寄ることができて、一人ひとりが役割をもって活動できる場にしたい!」というワークショップメンバーの思いがこもっています。

今後、このコンセプトをもとに、各小学校区においてステーションの候補地探しや運営組織づくりなどの検討を進めるため、4月からのワークショップメンバーに加え、9月号広報でメンバーの追加募集を行い、今回の第7回目のワークショップ開催となりました。

開催にあたり、市長がメンバーのみなさんに話をした内容について、ご紹介します。

これまで私たちは、収入を得るために都会に出て仕事をし、自分たちが暮らす地域のことは役所に任せてきました。2050年に向かって日本全体が人口減少時代に入っており、現在、全国には300万人の認知症の人がいると言われています。今後、長久手市においても、高齢者が増えることは確実で、すべてを役所で行うことはできなくなっていくでしょう。そこで、もう一度、市民と役所の関係を作り直していく必要があると考えています。

市民が、役所のやったことを批評するのではなく、当事者となり役所と一緒に考え、まちづくりを進めていただきたいと思います。長久手の方言で『育つ』という意味の『しとなる』という言葉がありますが、みなさんで『しとねて』(育てて)いただきたい。



そのための場所のひとつが、地域共生ステーションであり、大きさ、形態、運営の方法に各地域によって特徴があってよいと思っています。

そのためにも、お互いがまちのことを知り、共有する必要があります。長久手市には、まちづくりの基本計画である第5次総合計画がありますが、総合計画といっても知っている市民はほとんどいません。市でも「市政まなび舎」、「市民記者」、「市政サロン」等の取り組みを始めており、市の職員にもまち出たり、他の市町に行ったりして、いろいろなことを見て、聞いて新しい提案をするように言っています。また、市からのお知らせは、現在、広報紙とホームページしかありませんが、もっとたくさんの市民に情報を伝えられる方法を考えていきたいと考

えています。

地域福祉計画の策定、市民まつり等も、市民のみなさんに考えてもらって、作っていただけるような取り組みを始めています。これまで50年かけてできた仕組みをすぐに変えることは難しいと思いますが、遠回りをしてでも良いので、これから長い時間をかけて取り組んでいきたい。そのはじめの一歩として、地域共生ステーションをみなさんと一緒に考え、作っていきたいと考えています。

